

ポットラック新聞

the Spring

Vol.
06



しゃべったこともない人からも
“おう! ミゼット号!”と呼ばれます

自作のミゼット号で通学する足達禄次くん

特集

つくってある?!

人はさまざまなものをつくりながら生きています。
「それが仕事だから」「より便利な暮らしのため」「…なんとなく」。
つくる理由もさまざまで、なぜかなくても困らないようなものま
でつくってしまう。何かをつくることに夢中になっている人の様子
は、生き生きとじていて楽しげでもあり、時には気の毒になるほ
ど苦しげに見えることも。
人がものを「つくる」という行為。どうやらその奥には、探りた
くなる秘密がありそうです。

三輪自転車ベースに、こつこつとカス
タマイズしてつくりあげたこだわりの愛車
「ミゼット号」。製作者は市内の工業高校
に通う足達禄次くん。これに乗って颯爽
とまちを行けば、すれ違う人たちが振り
返って二度見。撮影中も「あんだ、面白い
自転車乗ってるねえ。自分でつくったの
かね!」と、買い物帰りのおばちゃんに興味
津々の様子で寄ってきました。実は禄次
くん、港まちではそこそ有名な存在で、
毎日ミゼット号で学校に通う姿があちこち
で目撃されています。

「お父さんの影響で小さい頃から古い車や
オートバイが好き。迷わず自動車科のあ
る工業高校に進学しました。まだ免許が
ないので、自転車を自分でカスタムして乗
りたいものをつくっちゃおうと思って」。

念のため説明しておく、ミゼットは昭
和30年代から40年代にかけてダイハツが製
造して、爆発的な人気を誇った三輪自動
車。禄次くんにとって、一度は乗ってみた
い憧れの名車だそうです。そして、実は
自作の自転車はこれが三代目。一番の自
信作は初代の方なのだとか。

「屋根とドアも付けてより車っぽく仕上げ
ました。お母さんと一緒に、こういうの法
律上大丈夫ですか? って港警察まで聞き
に行ったんですけど、あんまりよろしくな
い、と言われて……」。

残念ながら初代号は目の目を見ること
なく、家の横で倉庫代わりに使われる運
命に。しかしこれこれなかつた禄次くんは、
その後、堂々と道を走れる新型ミゼット号
をつくりあげました。メカが大好き。けれ
どもスマホは持たない主義。人の目を気に
せず評価も求めず、好きなようにつくりた
いものをつくってきた禄次くんですが、最
近ちょっと変化が起きています。そのきつ
かけは「スーパーカー消しゴム」。これは、
次のページで紹介しますね。



つくって

まちの人の



港まちでは、通りを歩いているだけでもいろんなつくられたものを見かけます。何をどんな理由でつくっているのか聞いてみると、その目的も頻度もさまざま。「ひまなんだわ」と言いながら、できあがったものをうれしそうに見せてくれる人。毎日つくるために、日々の何気ない時間を観察したり、材料を収集するクセがついている人。「つくる」ことは特別なようで、実は誰もがしている(してしまう)行為みたくです。仕事とはまた別の、だからといって趣味という枠には収まらない「つくって」人たち。「つくる」ということは人間の性分みたいなものなのかもしれません。

柘町子さん(72歳)の「日々の記録あれこれ」



ちょっとした時間ができたとき、家で俳句を詠んだり絵を描いたり

俳句の会に誘われたのがきっかけで詠み始めました。月一回の句会に出さないとと思って句をつくるんだけど、あとで読み返すと日記みたいになっていておもしろいね。ハガキに季節の絵を描いたりもしてるから、最近は俳句を詠むとそこに絵を足したりすることもあります。俳句の先生が「見たまま感じたままを句にしたらいい」とおっしゃっていて、俳句も絵と一緒に描く。辞書を引いたりしながら、言葉で表現するのは楽しいですね。

足達禄次くん(17歳)の「昭和のスーパーカー消しゴム」



誰かのためにものづくりをすることも楽しい

昭和の名車をイメージした「スーパーカー消しゴム」をつくっています。プラスチックの板に展開図を描き、組み立てて型を取り、着色された消しゴムの素を流し込み成形するんです。学校で披露すると友だちにとっても喜んでもらえて、車種まで指定してリクエストされることもあるんですよ。いままでは自分がつくりたいものをつくってきただけなんですが、喜んでもらえるとうれやうになってしまっています!

吉永菜さん(70代)の「描いて楽しい絵手紙」



月1くらいで参加する教室で絵手紙を描いています

なにかをつくるのは夢中になれるからいいね。時間を忘れるみたいで。絵手紙をつくるようになってまだ1年ちょっとだけど、絵や言葉も先生に教えてもらいながら、字のバランスとか色の塗り方を考えながら描くのは難しいね。でも、気持ちや雰囲気を文字で表すのっておもしろいでしょ、これどうやって読むかわかる? 「楽」っていう字が人みたいになっていて、先生みたいに上手くないけど、描いて楽しいよ。

村井勲さん(84歳)の「道端ギャラリー」



ぬくい季節に外のイスで身近な素材を使って作品をつくっています

脳梗塞で倒れてから、リハビリのためにつくり始めて、3年くらいかな。最初は手が思うように動かなくて大変だったけど、今はだいぶ細かい作業ができるようになってきた。散歩の時でも枝やまつぼっくりなんかを拾っては、なにがつかれるかなと想像したり、空き缶の風ぐるま風で吹き飛ばされないように針金やペットボトルの蓋を使って改良したりね。もう少しぬくくなってきたら、つくりたい物がたくさんあるから、頭の中で計画してるよ。

升谷由美子さん(50代)の
「喫茶店ならではの作品」



ちょっとした時間に、
コーヒーの布フィルターを
素材にした服や帽子を
つくっています

毎年友人が、自作の服を持ち寄ってファッションショーを開催しているの。うちは喫茶店だから使用済みのコーヒーフィルターがたくさんあるんだけど、全部洗って、ほどいていくと一枚の生地になるの。1枚1枚染みの濃さがちがうから色の配置がとっても楽しいんです。もともと好きだったけど、母がお裁縫をするひとで、影響されたのかしらね。出来上がりまでに4・5ヶ月かかったかな。疲れていても「がんばって、楽しみにしてるよ」と言われるとついつい楽しくてやりはじめちゃいますね。

関谷四郎さん(71歳)の
「四季折々のお花情報マップ」



週末の空いた時間に
花の名所を巡って写真を
撮っています

20年ぐらい前に写真店で働いていた時、お客さんに写真を撮ってもらいたくて、花が咲くスポット情報を集めて写真と一緒にブログに載せたのが始まりです。それが結構反響がありましてね、自分も写真を撮るようになりました。今でもインスタやブログに写真だけでなく、地図や地域のイベント情報なんかも載せています。最近は列車と花っていうのがかっこいいんでね、出来るだけ列車が走っているところを選んで撮影しています。これからは港の紹介もしていきたいですね。

升谷トキさん(98歳)の
「自分の服は全部つくっちゃう」



家にいるときはほとんど、
ベットの上で生地を縫い
合わせた服をつくって
います

昔は裁縫学校に行かせてもらっていたからそこから好きになっちゃった。当時はそんなに洋服なんて買えないから自分で縫って、それがずっと。いまでも生地を見るとやりたくなっちゃう。息子のお嫁さんも裁縫が好きで時々いろいろな柄の生地を持ってきてくれるもので、それが嬉しくてね。最近はこのベストかな、昔はミシンも使っていたけどさすがにちょっと大変で、全部手縫いで、私のサイズに合うようにつくってるの。

市川恵子さん(73歳)の
「ひらめいたらまっしぐら・布小物」



昼間、思い立った時に自
宅の2階で人形やタペスト
リーをつくっています

昔は夜もつくっていたんだけど、最近は夜が早くなったから昼間つくっています。いいアイデアが浮かんで、作り始めたら集中しちゃうわね。今はおひなさまの時期だから、手づくりのつるし飾りやうさぎの雛飾りを飾っています。孫が生まれた時には、男の子だったら鯉のぼり、女の子だったら舞妓さんみたいに、一人ひとりにモチーフを決めてタペストリーをつくりました。素材は袴とか着物とか。たくさんいただいてね、何つくろうと考えると楽しくて、宝の山だね。

井ノ口澄子さん(67歳)の
「おすそ分け配達ピザ」



主に週末に、自宅の
キッチンで手づくりピザ

もともとパンをつくるのが楽しくって、その延長でピザにも挑戦しました。ピザって1種類だけじゃなくて色々な味を食べたくなっちゃうでしょ。だからいろいろお友達にもお裾分けしながら一気に何種類もつくっちゃうのよ。それで、私がつくったら、旦那さんが持ってく係なの。ときどき旦那さんも自分の知り合いに「今度もってくわ」って約束してたりするから、2人とも楽しんでるのよね。今日もそうだけど食べてくれるとやっぱりうれしいね。

大橋香代子さん(64歳)の
「年に一度のおこしもの*づくり」



おひなさまの時期に
お家の台所でおこしもの
づくり

おひなさまの時期になると娘や孫、いとこたちが集まってみんなでつくっています。この型、「政」って入ってるんだけどね。うちの主人のおじいさんが買った型で、名前の焼印が入ってて昔っぽくていいでしょ？ 子どもたちは他にもクッキーの型でハートなんかをつくったりもしていますね。おこしものはね、主人が大好きで、米粉に熱湯をいれてこねるのは主人の仕事になっています。大勢でわいわいとつくって、毎年子どもたちのためにやってくれるようなもんです。

※おこしもの……名古屋市などを中心に愛知県の一部の地域で桃の節句に供えられる和菓子。熱湯でこねた米粉を木型に入れて成型、食紅で着色し、蒸す。食べる時は少し焼き、砂糖醤油などをつけていただく。かわいい見た目とシンプルな味わいがやみつきに。

まちづくりと美術。 どちらも「つくる」だけど 共通点ってあるの!?

話すひと

佐藤克久
(美術家・「絵画の何か」展企画)

古橋敬一
(港まちづくり協議会事務局)

聞くひと

谷 亜由子

美術家として創作を続ける佐藤さんと、まちづくりを仕事にしている古橋さん。そんな二人が「つくる」ことについて語り合ったら、思いがけない共通点が見えてくるかも……。そんな興味から対談の場をもうけました。

生活に直結していないものをつくる難しさ

佐藤.. ああ、今日はそういうテーマなんですね。話、めっちゃ合いそうですよ。

古橋.. 実は僕も前からずっとそんな気がしていました(笑)。前から聞いてみたかったですけど、アーティストって作品をつくるにあたって最初のとっかかりとか、描き始めるところですごく悩むそうですね。

佐藤.. そうなんです。

古橋.. それでコーヒーをわざとこぼしてみたり、たまたまできた染みに手を加えてみたり、いろいろなおもしろいことをする。他にも絵を描くためにわざわざ面倒な装置を用いたり、あれこれやってみるというんですね。

佐藤.. そうそう。普通に考えたら、そんな面倒なことしなくても描きたいように描けよ！って思いますよね。

古橋.. けど、その遠回りこそが「絵画の何か」ってことを思考することだし、すごく興味深いところだなと思います。

佐藤.. 作品を通して伝えたいことなんて本当はなかったりするんです。アーティストがこんなことを言うのはおかしい話ですが。

——アーティストと名乗って作品を生み出し続けている人たちは、理由やきっかけよりも、描かずにいられない、つくりださないと

情熱で作品をつくるのだと思っていました。
佐藤.. いや、意外とそうでもないんです。中には奇跡的に、そういう情熱に恵まれた人もいることはいますが。
古橋.. 「絵画の何か」という展覧会企画を考えるにあたって、創作活動と生きることが直結していない芸術家を対象にすることが前提になっていました。佐藤さん自身も「つくりださないと生きていくには直結していないタイプです」と言われていましたね。

佐藤.. そうですね。本当は、直結していればいいな、そうであれば楽だろうな、とは思いますが。
——それは、子供が作為なく紙に向かって無邪気に描く、みたいなことですか？
佐藤.. そうそう！それがしたいのにはできない。多くの芸術家が目指す、憧れるというのはそこなんです。人は年齢とともに段々と知識が増えて、教育も受けたりして、根源的に持っているはずの欲求が去勢されてしまうんです。それなのに一度アーティストと名乗ったからには、つくることをやめようと自分が何者でもなくなっちゃったりやめられない。作品さえ生み出していけば、一応アーティストと呼ばれて、自分自身でもそうだと思っていられる。そのために描くのもしれません。だから僕は基本的に、これだけ世の中にも溢れ、みんな豊かに暮らしているのに、お前のつくるものなんか本当は必要ないんだっていうスタンスでいたいんです。

まちづくりは抽象画的？

お前のエゴで勝手につくりだしたものが、ほかのものと同じように人々に満足や感動や幸せを与えられるのか？と聞かれたら、そうではない可能性の方が大きい。だからこそ、謙虚な姿勢は忘れないようにしたいと思いがちです。

古橋.. 僕はアートに関してはまったくの素人で、作品を見ても「この絵はいくらぐらいなんだろう？」とか考えちゃう。仮にお金を出して絵を購入したとしても、ちゃんと保管しないと傷んだり、カビが生えたりするじゃないですか。価値の高いものであれば、その後も展覧会に貸し出したりするので、お金を払って買った人は、所有権と同時にしっかり保管する義務みたいなものも引き受けるわけですよね？ 芸術の世界のそういう常識も他にはないことで、面白いなと思いました。

佐藤.. お金を払って買ったのに義務が生まれるってイヤですよ(笑)。

古橋.. 自分で買っても自分のものじゃないみたい。不思議だなあ。だから僕は、アートを目の前にするとわからないことだらけで興味が尽きません。自分の理解や常識を超えてることって面白くないかな。
佐藤.. 素晴らしいですね。古橋さん、芸術家



に向けてますよ！

古橋.. いやいや。それはないない(笑)。でも理解の範疇を超えているっていうのは、言い換えれば自分と対象との間の「ズレ」なわけですよ。そこを理解し合うには、やっぱり説明や対話が必要だと思っんです。わからないままにしておくってとんどもんそれが積み重なって、やがては誤解や偏見、敵意にまでなりかねない。それはアートの面白さと怖さでもある。

——そういう見方をすれば、いろいろな人が集まるまちは「ズレ」の集合体とも言えます。

佐藤.. そうですよ。古橋さんは興味の「質」が高いんです。たぶん。だからまちづくりを仕事にできるんでしょうね。どんなことにも言えるのですが、わからないことをわからないと言って投げ出せば、それ以上歩み寄ることはできなくなる。でも、わからないという感覚を興味に変えれば先に進めます。わからないものに出会ったとき、反感を感じたり諦めたりするのはなく、対象への興味が上回ってしまう古橋さんだからこそ、まちをつくる人でいられるのではないですか？ そのうえ、まちづくりって「ゴールが見えないですよ。アートはある意味、作品をいくつか作って展覧会を開けばとりあえずゴールってことになる。まちづくりはゴールのないものに取り組んでいるということですよ。」

古橋.. 確かに「ゴールは見えないですね。でも、そういう意味で言えば、絵だっどどの時点で完成とするか、どこで筆を置くかを決めるのは難しいそう。

佐藤.. だから僕はあるタイプの抽象画が嫌いなんです。嫌いというのは、作品や絵そのものことではなく、抽象画に向き合うこと、取り組むことが嫌ということ。終わりが見えないし筆を置くタイミングが難しい。他の人の作品を見ていても、これは絶対苦しいやつだ！ っていうのがわかるからしんどいんです。でも古橋さんなら抽象画、描けそうですね。

抽象画って、いじろうと思えば延々といじり続けられちゃう。けれど、やめどころを見誤ると「ああ、少し前の状態の方が良かったのかも」とか思えてきて、そうなると思いますやめられ

ない。そのうちにまた、ここだ！ っていうタイミングがやって来るような気がしてとんどもんはまっていく。それに似てますね。

古橋.. うわ。佐藤.. そもそも古橋さんには、まちづくりという仕事をするときに、完成というかゴールのイメージはあるんですか？ こうなれば、僕が描いていた理想のまちなんだ！ みたいな。

古橋.. 実は、僕がまちに入っったばかりの頃、あなたはまちづくりの専門家でしょう？ だったらどんなまちなにするのか明確なビジョンを示してみろって、いろいろな場面でよく言われたんです。

佐藤.. そんなの答えられないですよ。

古橋.. ……(苦笑)。

佐藤.. こうなったらいいよねっていう理想なら語れそうだけど、それだと実際にはあり得ないおとぎ話みたいになりそう。だいたい、まちの定義からしてあいまいですよ。古橋さんの考える、まちの最小単位を表すとしたら何ですか？

古橋.. そうですね、自分と誰かとの関係性、かな。しかし、二人いればそれが「まち」かと言われたら、そんなわけないとも言いたくなるけど。それでも関係性のない中に本質的なまちはないと思います。

佐藤.. ああ、なるほど。

——「まち」が他者との関係性から始まるとしたら、アートの作り手である佐藤さんは、誰かとの関係性がなければ作品づくりはしませんが？

佐藤.. うん、難しいな。考えても答えは簡単に出ないですね。でも、関係性がなかったら今とは違うものをつくっちゃうかもしれない。つまり、僕は装っているんですよ。きつと。

誰が何と言おうと自分自身が面白く思えるものならば自由にのびのびつくると思う。でも今の僕は作品と自分が直結できていないから、人の目を意識しながらつくっているんです。自分だけのためにつくるなら、理解されないようなものでも楽しんでくれるはずですよ。まさに「子供の描く絵」というやつ。ああ、なん

か正直に言い過ぎちゃってますね。

古橋.. でも、誰かに褒められたいからとか、認められたいからとかでなく、自分がつくりたいからつくっただけというものでも、それが結果的に普遍的価値に通じるとしたら、そこにはすでに関係が生まれるとも言える。最初から相手に影響を与えようとしてつくる、ということと重要視しすぎるのも違うなという気がしますよね。自分と向き合う中から生まれたものが持っている普遍的価値への可能性を信じたい。与えられる側もまた、受け取るばかりでは本質的なものは受け取れない。自ら考えて向き合うということは互いにとって大切なことじゃないかな。

佐藤.. 結果や評価が見えている方向を目指すより、本当はどっちに向かうのかわからない方に踏み込んでいきたいんです。想定どおりに仕上がったものは、結局その人の世界を超えないじゃないですか。なんかわかんないけどこんなのできちゃった！ みたいなのは、その人の今を超えているということだから、思いがけなく素晴らしいものである可能性がある。

古橋.. そういえば今日、一緒に名古屋美術館で「辰野登恵子」さんの展示を見てきましたよね。そこで「時間そのものが筆を運び、また筆を止め、後ずさりしてしばし見入る。そうした私的でありながら、自分が存在していないかのような時間が作品を醸成しているような気がする」というような辰野さんの言葉を見つけたんですけど、それってまさに僕にとってのまちづくりと同じだなんて思いました。

佐藤.. なるほど。アーティストにとっては、きっとそういう作品こそが自分をその先に連れて行ってくれるんですよ。古橋さんの場合で言えば、まちが、その先の世界に自分自身を連れて行ってくれるということになるのかも。

古橋.. そういうことか！ まちづくりもそうであつたらすくいいな。

佐藤.. うん。本当にいい！ それ、いいですよ。

佐藤さんと古橋さんが企画した展覧会

撮影：城戸保

2F Project Space

み(ん)なとまちでなににする？ 展

2019年1月26日(土) — 3月16日(土)



写真と文章で十数年の歩みを紹介



港まちを俯瞰できる模型

3F Exhibition Space

MAT Exhibition vol.7 絵画の何か Part3

設楽知昭 2019年1月22日(火) — 2月16日(土)

秋吉風人 2月19日(火) — 3月16日(土)



設楽和昭 個展 展示風景



秋吉風人 個展 展示風景

「なごやのみ(ん)なとまち」を目指し、子育てや防災をはじめとしたコミュニティ事業、魅力・賑わいづくり、アートプロジェクトなどの活動を行っている港まちづくり協議会。2018年度は、まちづくりのビジョン改訂に向け、地元住民へのアンケートや有識者会議などを実施し、話し合いを重ねてきました。本展では、これまでの活動と一連の改訂プロセスをご紹介し、新たなビジョン案についてのパブリックコメントを募集しました。また、名古屋芸術大学の学生が制作した港に関する作品やみなとまち空き家プロジェクトが制作した750分の1の港まちの模型も展示しました。

佐藤克久とMAT,Nagoyaの共同企画として、2015年、2017年に開催し、好評の展覧会シリーズ第三弾。今回は愛知を拠点にアーティストとしてまた教育者として、それぞれの活動を展開してきた設楽知昭、秋吉風人の作品を個展形式で紹介しました。設楽は鏡や日用品など、さまざまな技法や手法で描いた作品などを含む、約30年間の作品を一同に展示しました。秋吉は昨年まで滞在していたドイツで制作した日本未発表の作品を含む3シリーズを展示しました。会期中にはトークやラウンドテーブルなどのイベントを開催し「絵画」について思考し、話す場をひらきました。



ポップアップかわら版

港まち限定で毎月配られている、とってもディープな「ポットラック新聞かわら版」。その取材の様子をちょっとだけご紹介。かわら版を読みたい方は港まちへ！

今号の「港まちごはん!」でご紹介している井土さん家のおむすび。1年前に発行したかわら版9号では、井土さん家の玄関先にある立派な桜木とともに取り上げました。美味しいおむすびと満開の桜。なんて贅沢なひととき。



名古屋港の花火

名古屋港では、夏・秋・冬に花火が上がる。全国的にもテーマパーク以外では珍しいのではないかと思う。夏の花火は、大好きな『みなと祭り』。1996年に第三月曜日が『海の日』になるまでは、7月20日、1学期終業式の日がお祭りでしたので、子供の頃は、夏休み

まちなかコラム

港まちの方々が綴るそれぞれのストーリー。

Vol.06

栗田友希栄

←ベイリー裕美さんから←白鳥繁世さん←古田直江さん←大倉一元さん←伊藤京次さん

近所の人や常連さんはみんな親戚のよう。そんなまちの憩いの場きさ姉妹の頼れるお姉さん。

スタートの合図のようなもの。心置きなく楽しんでました。踊り子として祭りに参加してる今はゆっくりは見れないけど、山車のバックに花火が上がってるのも、風情があり好きです。秋・冬の花火は音楽付き。家から花火だけは見えますが、音楽と一緒に感動がアップ。ここ数年、県外の友人が花火の日に合わせて遊びにくるほど。家から港までの往復のお喋りや花火の後の食事。全てが楽しく、家族、友人との思い出が増えて嬉しい。しかも年々花火の技術が上がって、芸術レベルも上がって本当に素晴らしい。どの花火も私にとって自慢の花火。ずっと続いて欲しい。
↓次は「カメラ調剤薬局」の亀田ひとみさん

港まちごはん!

六杯目



井土さん家

港まちの暮らしの中にある「美味しい!」を探る「港まちごはん!」今回は、こだわりのおむすびと盛り付けがとってもすてきな小鉢が並ぶ井土さん家のお屋ごはんを訪ねました。



おにぎりじゃない、おむすび

「おにぎりだときゅっと力が入っちゃうでしょ、米を押すんじゃなくて、三角形の手に収める感じ」と言う井土さん。大きさにもこだわりがあるらしく「男の人だと2口、女の人だと3、4口でパッと食べれる大きさ」とのこと。手を濡らし、塩を揉み込み、お米を掴み、形を整える。そんなシンプルなおむすびが、なんでこんなに美味しいのだろう。こだわりがたくさん詰まった井土さんのおむすび、まさに絶品でした!

Comment

「お袋のおむすびが日本一だ!」
と思ってたんだよね。昔、ガールフレンドがつくってくれたのも、いまいちだなぁと思ってさ、言えなかったけどね(笑)

「お母さんのおむすび、そんなに美味しかったんですか!」

「そりゃもう、でも俺が握ったのをお袋が食べたなら、私はもう握らないってさ」

「なんか一子相伝の技術みたい…! カッコいい。」

「手袋はつけて握らない。その人の手の味が勝負」

「人によってそんな変わるもんですか?!」

「よし、誰がつくったか当てあいこしょう!」

みなとのみかた

文：小島邦康 撮影：三浦知也

Vol.06

港まちをロケハン(ロケーションハンティング)して出会った気になる風景を、本紙カメラマンがパチリ。デザイナーがブツブツ言います。



港まちを歩くといかした錆びっに出会える。そこそこイケてる錆びっなら他の町でも見かけるけれど、これほど豊かな錆びにはちょっとお目にかかれな。これ潮風のなせる技だ。なんて、いつものように勝手に妄想を膨らませて楽しんでる。
今は古いものほど価値がある時代。だからおしゃれな雑貨店やカフェなどで、不自然に古めかしくエイジングされた雑貨や建具が目につく。私も子供の頃、たいそうガンブラに「汚し」を入れたものだから気持ちよくわかる。ようは時間、いやロマンが欲しいのだ。いかにその昔、ここでアムロとシャアが死闘を繰り広げたかのようなロマンが……! だから「雑な汚し」はダメ絶対。まずは港まちで本物のロマンに触れてみよう。

編集後記

「つくる」という漢字には、作る・造る・創るの3つがあります。その違いは各自調べてもらえれば良いのですが、どうやら3つ目の(有形無形を問わず新しいものを)創るが厄介なのです。そりゃ何かをつくるなら新しく他にないものの方が良いのですが、勿論そんな簡単ではなく、創るという意味が呪いのように付きまといま。しかも常用漢字表において「創」には「つくる」と書くそうです。非公用のくせに僕らを苦しめるヤツ…生意気な。もういっそ別れてやるかとも思うのですが、今回の特集で改めて創るの魅力を再認識し、それに振り回される日々は続くのです。三浦知也(フォトグラファー)

ポットラック新聞 -the Spring- vol.6
2019年3月25日発行

- 企画 港まちづくり協議会
- 編集 竹内厚 (Re:S)
- デザイン 小島邦康 (Artical inc.)
- 進行 岡西康太 (港まちづくり協議会)
- 表紙撮影 三浦知也
- 協力 Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya]
- 印刷 東海共同印刷
- 発行 港まちづくり協議会
〒455-0037 名古屋港区名港1丁目19番23号
Minatomachi POTLUCK BUILDING
TEL | 052-654-8911
MAIL | info@minnatomachi.jp
- WEB www.minnatomachi.jp
- Facebook www.facebook.com/nagoyano.minnatomachi

港まちづくり協議会
JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN
Minatomachi
POTLUCK BUILDING

※港まちづくり協議会は、ポートピア名古屋設置に伴い競艇を施行する自治体(蒲郡市など)から名古屋市に交付される「環境整備協力費」を用いたまちづくり事業を、住民と行政との協働により検討・実施しています。
※本紙に掲載されている内容の無断転載、転用及び複製などの行為はご遠慮ください。

旅するコラム

港まちを飛び出したバトンは誰の手に。テーマは「誰かに教えたいとおき」です。

Vol.06

八幡亜樹

←小田原のどかさんから←堂端徹さん←小杉遊樹さん←渡辺英司さん←ペアート・ソデラーさん

映像作家、滋賀県在住。主に映像インスタレーション形式で取材をベースとした作品制作を行っている。

「子供達や職員の思い出のメニューを食べるといふ企画をやっているんです。親との思い出が少ない子には酷だ、という声もあります。でも、思い出はこれから作っていくべきなんです。」と食育課の宮川さん。ここは山間の自然豊かな児童養護施設。思い出のメニューの他にも、世界各
国、日本各地の郷土料理を献立に組み込む。外食の機会の少ない施設の子が、食体験において同世代と差がつかないようにしたいとの願いだ。さらなる「とおき」は、運動会のお弁当の入れ物へのこだわり。以前はお祭りの屋台で使われる透明なプラスチック容器を使用していたが、容器だけで施設の子とわかるし、同級生の特別なお弁当と比較すると、侘しい気持ちにさせてしまっていた。もうそんな気持ちにさせたくない、包装紙や手提げ袋にもこだわりたい! と経営側を説得した。その時の可愛い紙袋を、未だに大事に持っている子供もいる。ああ、食の喜びは、そういう思いの深さに乗って、やってくるんだなあ。
↓次は児童養護施設「鹿深の家」の宮川哲治さん